

# 平成 26 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

## 成人期以降における生活支援プログラム開発

### I. 事業要旨

北九州市発達障害者支援センターの相談者の中で、成人期の占める割合は高く、平成 25 年度は、1003 人の相談者のうち、19 歳以上の相談者は 499 人であった。また、継続して相談があった人の中で 172 人には所属がなく、在宅生活を送っている。在宅生活を送る人の中には、学生時代や就職後の挫折経験により対人緊張や不安が非常に強い人や、障害特性により、個別の面談を重ねても、なかなか状態が改善しないケースが含まれ、相談が長期にわたって継続している状態がある。このプログラムの目的は、在宅生活が続いており、障害福祉サービス事業所の利用等も難しい相談者を対象に、発達障害者支援センター職員と共に行う作業体験等を通して、自信をつけてもらい、社会との接点を見つけていく契機にしてもらうことである。発達障害者支援センターに継続的に相談がある、19 歳以上の人を対象とし、関係施設を利用して、発達障害者支援センター職員と一緒に簡単な机上作業や清掃等の作業を行ってもらう。また、本人の状態や希望に合わせ、当事者会への参加に繋いだり、地域の障害福祉サービス事業所での体験実習を行い、事業所の正式利用に繋いでいく。今年度は 13 人がプログラムに参加し、2 人が障害福祉サービス事業所を正式利用した。事業所利用に至ったケースは少ないが、5 人が、事業所での体験実習に参加し、将来は正式利用したいという意向を示している。また、行動記録や本人、家族へのアンケート調査結果からは、参加者がプログラム参加中に、職員に自分のことを話す機会が増えたり、生活面においても、「店員に聞くことができるようになった」など、対人・コミュニケーション面の変化が見られていることがわかった。また、家族は「早起きするようになった」、「外出の機会が増えた」、「表情が明るくなった」といった変化を感じていることもわかった。参加者の殆どは在宅期間が長く、すぐに障害福祉サービス事業所に繋ぐことは難しいが、参加することで状態が改善し、家族との関係がよくなったケースもあった。このようなことより、生活支援プログラムは、所属がない発達障害者にとっての有効な社会資源になっていると考えられる。

また、本事業では、本人へのアプローチだけではなく、発達障害の本人、家族に対して、様々な就労スタイルや地域資源があることを理解してもらい、就労に向けて必要なことを学んでもらうための、「発達障害者の就労支援について」の研修会と、発達障害者を受け入れている福祉サービス事業所の支援技術の向上のための「発達障害者支援のための実務研修会」を実施した。どちらの研修会も好評で、就労支援についての研修会では、「就労に向けて必要なことがわかった」、「各機関の役割やサービスの内容などが分かりやすかった」等の感想が得られた。また、障害福祉サービス事業所対象の実務研修会では、高機能の発達障害に特化し

て支援を行なっている障害福祉サービス事業所の取り組みの報告について、「参考になった」や、「現場でもいかしたい」という感想が得られた。

今後も実践に生かせる研修会を実施していくとともに、本プログラムにおける取組や、効果について情報を発信し、地域の事業所や相談支援機関等と連携していくことが必要と考える。情報発信の方法や、連携の在り方が今後の課題である。

## Ⅱ．事業目的

本事業では、相談者の中で、障害福祉サービス事業所の利用も難しく、在宅生活が続いている人を対象に、発達障害者支援センターの職員とマンツーマンで作業を行う場を提供する。簡単な机上作業やパソコン作業、清掃作業等を通して、自身の作業面での得意・不得意を理解したり、コミュニケーションの練習を重ねたりする中で、自信をつけ、社会参加の契機としてもらうことを目的とする。

また、作業体験だけでなく、本人や家族に向けた「就労支援研修会」を実施し、本人や家族が、多様な働き方を知って、仕事へのイメージを持ってもらう。更に、地域の障害福祉サービス事業所に対しては、先進的な取り組みをしている障害福祉サービス事業所の取り組みを紹介するための研修会を実施し、有効な支援技術について学んでもらう。このような取り組みを通して、本人を支援する家族や障害福祉サービス事業所等の理解も促進していくことを目的とする。

## Ⅲ．事業の実施内容

### 1．発達障害者支援センターにおける作業活動

#### ① 対象者

北九州市発達障害者支援センターに継続的に相談がある人を対象とした。対人緊張や不安が強く、長期にわたって在宅の状態が継続している人や、自己理解が難しく、高校卒業後、適切な進路選択ができないままに在宅となっている相談者を対象とした。

今年度参加した対象者 13 名の内訳を、表 1 に示す。

表 1 対象者の内訳

年齢	19 歳：1 人 20 歳代：5 人 30 歳代：2 人 40 歳代：5 人
性別	男性：9 人 女性：4 人
診断名	アスペルガー症候群：1 人 高機能自閉症：3 人 自閉症：1 人 広汎性発達障害：4 人 注意欠陥多動性障害：1 人 未受診：3 人
手帳	精神障害者保健福祉手帳 2 級：3 人 精神障害者保健福祉手帳 3 級：2 人 療手帳 B2：4 人 療育手帳 B1：1 人 なし：3 人
精神科通院	あり：11 人 なし：2 人
仕事経験	あり：5 人 なし：6 人 福祉サービス事業所：2 人
プログラム参加期間	1 年未満：5 人 1 年以上～2 年未満：5 人 2 年以上～3 年未満：3 人

## ② 実施内容

方法	北九州市発達障害者支援センターがある、北九州市立総合療育センターの会議室や相談室等を使用し、参加者と発達障害者支援センターと職員がマンツーマンで、作業を行った。参加者のうち2名は、月1回合同で作業を行なった
頻度	参加者のペースに合わせて実施した。頻度は、週1回(3人)、月2回(4人)、月1回(6人)で、1回の参加時間は概ね1時間であった。
作業内容	簡単な机上作業(ラベル貼り、スタンプ押し、ファイル作成、プリントの三つ折りなど)や、パソコン、清掃などを職員と行なった。参加者の興味関心や状態に合わせて、手順書やコミュニケーションカードを使用するなどの配慮を行い実施した。

## ③ 参加状況

平成27年3月1日現在の参加状況を、表2に示す。

表2 参加状況

状態	人数	参加状況
参加中	11人	・継続して参加(10人) ・事業所の体験利用後、8月より正式に通所を始めるが、体調不良等が原因で、2月よりプログラムに戻る(1人)
終了	1人	・就労継続支援B型事業所へ移行(1人)
中断	1人	・体調を崩し、6月よりプログラム参加を中断(1人)

## 2. 障害福祉サービス事業所での体験実習

### ① 対象者

1-①の対象者の中で、体験実習を希望した5人に対して実施した。

### ② 実施内容

参加者の特性や興味関心、居住地等に配慮して事業所の選定を行い、頻度は利用者の状態に合わせて設定した。毎回、発達障害者支援センターの職員が同行し、一緒に1時間程度の作業を行った。作業内容は、事業所の作業内容によって異なるが、簡単な組み立てや検品、梱包、菓子箱折りなどの室内軽作業などである。本人希望により、1名が正式利用に繋がった。

### ③ 参加状況

前期と後期に分けて、計4か所の障害福祉サービス事業所で実施した。  
(資料 1-1)

体験実習参加者と実習場所を、表3に示す。

表3 体験実習参加者と実習場所

	期 間	参加者	参加回数	実習場所
前 期	平成26年6月1日	1名	5回	就労継続支援B型事業所 N
	～平成26年7月31日	2名	3回	〃 N
後 期		1名	7回	就労継続支援B型事業所 O
	平成26年10月1日	1名	6回	〃 N
	～平成26年11月30日	1名	2回	〃 P
		1名	2回	〃 Q

発達障害者支援センター内での作業活動、並びに障害福祉サービス事業所での体験実習の効果検証に関しては、年度当初（年度途中から参加した人は参加開始時）と、年度末にS-M社会生活能力検査とGHQ精神健康調査を行い結果を比較した。また、活動時の行動記録からの検証を行うとともに、年度末に、アンケート調査を本人（資料 1-2）と、家族（資料 1-3）に対して実施した。

#### 3. 発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会

プログラム参加者やその他の発達障害当事者とその家族が、障害に応じた様々な働き方や、就労に向けて必要なことを学んでもらうために、平成26年12月14日（日）に研修会を実施した。（資料 1-4）

効果検証は、研修会終了後にアンケート調査を実施した。（資料 1-5）

#### 4. 障害福祉サービス事業所職員に対する実務研修会の実施

プログラム参加者は、まずは、障害福祉サービス事業所の利用等が望まれるが、北九州市において、発達障害に特化した事業所は1カ所しかなく、事業所の発達障害についての理解を進め、支援技術の向上を図ることが課題である。そこで、障害福祉サービス事業所の職員を対象とした研修会を平成27年3月15日（日）に実施した。（資料 1-6）

また、研修会終了後には、生活支援プログラムについての事業説明を行い、障害福祉サービス事業所の体験利用等における、理解と協力を求めた。

対象は、障害福祉サービス事業所において成人の発達障害者を支援している職員や、ひきこもり支援センター、若者サポートステーション等の支援機関職員とし、研修会終了後にアンケート調査を実施した。（資料 1-7）

#### IV. 分析、考察

##### 1. 作業活動及び障害福祉サービス事業所での体験実習

###### ① S-M社会生活能力検査の結果

検査は、年度始めと年度末に発達障害者支援センター職員が、本人または家族から聞き取りを行い実施した。年度を通して参加している9人の結果を表4に示す。上段が今年度の開始時の数値で、下段が年度末の数値である。変化が見られた項目のみ、年度末の数値を示した。

表4 S-M社会生活能力検査の結果

	A	B	C	D	E	G	H	I	K
社会生活年齢	13-0以上	6-9 7-0↑	7-5	7-6	11-0 11-4↑	8-4 8-10↑	8-3 8-6↑	12-0	13-0以上
社会生活指数	100	81.0 84.0↑	57.1	57.7	84.6 87.2↑	64.0 68.0↑	63.0 65.0↑	92	100
身辺自立	12-6以上	10-6	8-6	10-6	10-6	8-6 10-6↑	10-6	12-6以上	12-6以上
移動	13-0以上	11-1 12-0↑	8-4	6-6	13-0以上	11-1	7-5 8-4↑	13-0以上	13-0以上
作業	13-0以上	6-7	8-9	10-2	13-0以上	5-10 6-7↑	7-4 8-0↑	12-0	13-0以上
意思交換	13-0以上	6-2	6-8	7-2	9-10	11-8	9-0	7-8	13-0以上
集団参加	11-2	3-1	4-2	5-5	9-4 10-2↑	3-7 4-2↑	7-3	13-0以上	12-6
自己統制	13-0以上	6-10 7-4↑	9-2	7-4	10-11 12-2↑	13-0以上	9-2	13-0以上	13-0以上
	変化なし		変化なし	変化なし				変化なし	変化なし

※↑は状態が良くなっていることを示す。

B、E、G、Hの4人は、身辺自立、移動、作業、集団参加、自己統制の数値が若干上がっている。具体的には、「行きなれた場所に歩いて行く。」、「病気にかからないように自制する。」、「汚れた服を自分で着替える。」等の項目が達成された。一方で、意思交換では変化が見られた人はいなかった。数値に変化がなかったのは5人であるが、家族からの聞き取りの中では、「自分でインスタントラーメンを作るようになった。」などの変化が見られた相談者もいた。

## ② GHQ 精神健康調査の結果

検査は、年度始めと年度末に実施し、本人が記入した。年度を通して参加している 8 人の結果を表 4 に示す。

中等度以上の症状と認められる得点は下線で示した。中等度以上は、「身体症状」と「不安と不眠」が 4 点以上、「社会的活動」と「うつ傾向」が 3 点以上である。上段が今年度の開始時の数値で、下段が年度末の数値である。変化が見られた項目のみ年度末の数値を示した。

表 5 GHQ 精神健康調査の結果

	B	D	E	G	H	I	K	L
身体的症状	1/7	<u>5/7</u> 6/7 ↓	0/7	<u>5/7</u>	2/7 4/7 ↓	0/7	3/7 4/7 ↓	<u>6/7</u> 7/7 ↓
不安と不眠	5/7	<u>4/7</u> 6/7 ↓	2/7 3/7 ↓	1/7 4/7 ↓	0/7	0/7	<u>6/7</u> 4/7 ↑	<u>5/7</u> 7/7 ↓
社会的活動	0/7	1/7 4/7 ↓	2/7	0/7 1/7 ↓	0/7	0/7	<u>6/7</u>	2/7 5/7 ↓
うつ傾向	1/7	<u>4/7</u> 7/7 ↓	0/7	1/7	0/7	0/7	<u>6/7</u>	<u>7/7</u> 5/7 ↑
	変化なし					変化なし		

※ ↑ は状態が良くなっていることを、↓ は状態が悪くなっていることを示す。

D、E、G、H、L の 5 名は、数値的には状態が悪くなっているが、D、G、L は、評価時に家庭内での問題（家族の病気や、家族とのトラブルなど）を抱えていたことが影響していると考えられる。E は、福祉サービス事業所の利用中に体調を崩し、評価時もコンディションが整わない状態が続いていた。

## ③ 行動記録の結果

参加者の、行動記録から抽出したエピソードを、表 6 に示す。

表 6 行動記録から抽出したエピソード

	エピソード
対人 コミュ	<ul style="list-style-type: none"> <li>福祉サービス体験実習に向けて、2 箇所の実業所見学を行った際、「同年齢の方はいますか。」と自ら質問する。</li> <li>職員が挨拶した時に、僅かだが会釈するようになる。</li> <li>合同で作業を行っている参加者が、10 枚数えるたびにメモ帳に記入しているのを横目を見て、同じやり方でやってみたいと意思表示する。</li> <li>材料がなくなると「次のも折って良いですか。」と確認できる。また、職員に対</li> </ul>

ニ ケ ー シ ョ ン 面	<p>し流れ作業を提案し、「(この方が) 効率が良いと思います。」と提案する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 合同で作業を行っている参加者が本人の終了を待っていることに気づき、作業スピードを上げる。</li> <li>・ 作業終了後に自分が鑑賞した映画の「チラシ」を見せ、自ら感想を話す。</li> <li>・ エクセルを使ってのカレンダー作成で、分からない時に、本人から質問する。 (障害福祉サービス事業所の体験実習時のエピソード)</li> <li>・ 作業が上手くいかず、同じ箇所を何度も繰り返し行っている。事業所職員に声をかけられると、「上手くできません。」と伝える。</li> <li>・ 自分から事業所の扉を開け「こんにちは」と挨拶をする。</li> <li>・ 初めての体験実習で、職員に自ら「こんにちは」と挨拶をする。作業中分からないところについて、自ら事業所の職員に質問をする。</li> </ul>
作 業 面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 作業後「(自分には) 動きがある仕事の方がよい」と話す。</li> <li>・ パンフレットを 10 枚ずつ揃え、交互に積み重ねていく作業を行う。20 分行くと、ペンを取りだし、10 枚数えるごとに紙に記入していく。</li> <li>・ 職員が作成したものを手に取り、「これを見本にしたいので、机の上に置いておきます」と言う。</li> <li>・ 「単純作業は好き」と話す。</li> <li>・ 「パソコン作業は楽しい」と言う。 (障害福祉サービス事業所の体験実習時)</li> <li>・ 「こういった作業(箱折りの仕事)は嫌いではない。」と話す。</li> </ul>
自 信 や 意 欲 面	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「郵便局の配達スタッフの採用試験を受けて、アルバイト代でパソコンを買いたい」と話す。</li> <li>・ 「簡単な作業は出来るが、集団が苦手である。少人数で作業できる場(障害福祉サービス事業所)があれば見学は可能である。」と言う。</li> <li>・ 他の参加者との合同の作業で、作業スピードが早くなる。作業中は席から離れることができなかったが、予め出来上がった物は持って来るよう伝えておくと、席を立て持って来る事が出来た。</li> <li>・ 来年は、「金銭管理を出来るようになりたい」、「一人で外出が出来るようになりたい」、「ソーシャルクラブなどの活動の場に参加したい」、と自分から話す。</li> <li>・ 来年も、「今のようにここにきちんと来たいです。」と話す。</li> <li>・ 「前回の作業を生かして家計簿を作成した」と報告がある。 (障害福祉サービス事業所の体験実習時)</li> <li>・ 「次回から作業をもう一時間伸ばしてみようと思う」と自ら申し出る。</li> <li>・ 作業終了後、「だいぶ作業に慣れた。事業所の職員にも気軽に質問をすることができる。」、「次回もこのような機会があれば、(この事業所で)体験実習を行いたい。」と、同行した職員に話す。</li> <li>・ 実習終了後、「作業は、初めは難しかったけれど、段々慣れた。初めの方は緊張していたが、後の方は大丈夫だった。」と話す。</li> <li>・ 「暖かくなったら、午後のみ週 2 日程度であれば(事業所に)通えそう。」と話す。</li> </ul>

## 2. プログラム参加している本人へのアンケート調査結果

年度末の時点で、参加していた 11 名全員に対して実施した。アンケートは、対象者の特性に配慮し、職員がインタビューしながら記入を行った。

① 「生活支援プログラムに参加している目的」を、表 7 に示す。

表 7 「生活支援プログラムに参加している理由は何ですか」(複数回答可)

理 由	人数 (人)
ア 日中活動の場が欲しいから。	4
イ 家族以外の人との関わりをもちたいから。	8
ウ 作業(仕事)のスキルを身につけたいから。	4
エ コミュニケーションの練習をしたいから。	8
オ 福祉サービス事業所等の利用の準備がしたいから。	1
カ 参加を勧められたから。	4
キ わからない。	0
ク その他	0

② 「活動には慣れたか」を、表 8 に示す。

表 8 「活動には慣れましたか。」

	慣れた	少し慣れた	変わらない	慣れない	負担になっている	わからない
人数(人)	7	4	0	0	0	0

<その理由について>

- ・回数を重ねたから。(4)
- ・最初の頃と比べて、手際が良くなれたと感じ取れたから。
- ・最初は不安だったが、他のメンバーと一緒に作業をやり始めて、慣れてきたと思う。
- ・ソーシャルクラブに参加したのも慣れた理由だと思う。
- ・スタッフが優しく、分かりやすく話をしてくれるので慣れた。

③ 「生活支援プログラムの内容に満足しているか」を、表 9 に示す。

表 9 「生活支援プログラムの内容に満足していますか。」

	満足である	少し満足である	ふつう	少し不満である	不満である	わからない
人数(人)	4	3	4	0	0	0



<その理由について>

(満足・少し満足である)

- ・仕事に慣れてやりやすくなったから。
- ・スムーズに出来る簡単な作業なのでよい。
- ・大満足しているというものではないので、少し満足にした。
- ・先生が優しく、話しやすいから。

(ふつう)

- ・もう少しレベルの高いこともしてみたい。

④ 「生活支援プログラムを開始して、自分自身の理解についてや、生活の中で変化を感じるがあったか」を、表 10 に示す。

表 10 「自分自身の理解についてや、生活の中で変化をかんじることがあったか」

<p>&lt;仕事のスキルに関する変化&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・仕事において必要なことが、段々身につけているのではないかと感じる。</li><li>・事業所での経験を通して、手先が不器用だと感じた。</li><li>・封筒の糊付けが苦手なことが分かった。糊付けをする時に、下に敷いている紙が汚れるのが嫌なので、時間がかかってしまう。</li></ul>
<p>&lt;対人面・コミュニケーションに関する変化&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・アニメグッズを買いに行った時、分からないことを自分から店員さんに聞けるようになった。</li><li>・外食した時に、注文を自分で伝えることができるようになった。</li><li>・仕事はできるが、自分からなかなか人に話しかけられない。</li><li>・家族と買い物に行ったり、外に出かける機会が増えた。</li><li>・家族以外の人と話すようになった。施設体験は、つばさより緊張した。</li><li>・話しかた等、なるべく理性的にするよう、気をつけるようになった。</li></ul>
<p>&lt;生活面に関する変化&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・前に比べると買い物や図書館等に出かけることが増えた。</li><li>・無理矢理でも外にでるので、(生活支援プログラムに参加するために) 外に出ることが習慣化した。</li></ul>
<ul style="list-style-type: none"><li>・変化点がない (1)</li><li>・無回答 (2)</li></ul>

⑤ 「今後の生活や仕事についてどのような希望をもっているか」を、以下に示す。

- ・アーティスト、配達員、運転士になりたい。
- ・人と接しない仕事や、イベントの裏方の仕事ならできるかもしれない。
- ・清掃の仕事はしてみたい。教えてもらえばできると思う。接客の仕事に比べれば、汚くても苦にならない。
- ・いつか作業所に行きたい。
- ・自分に合う作業が見つかると思う。
- ・仕事に就きたい。人付き合いをよくしたい。
- ・居住区以外のところに、一人で外出したことがないので、できるようになりたい。家から親戚の家まで行けるようになればよいと思う。
- ・今の状態を続けていきたいと思っている。今後については検討中。
- ・今は全く考えていない。まずは体力づくりをする。
- ・今はよく分からないし、あまり考えたくない。
- ・無回答（2）

⑥「生活支援プログラムについての要望」を、以下に示す。

- ・もう少しレベルの高いこともしてみたい。
- ・時間を伸ばしたい。
- ・他の人と一緒に作業をしたい。
- ・次のステップに進めると思った時、職員からの提案があるとよい。
- ・今のままでよい。
- ・特になし（3）
- ・無回答（2）

本人へのアンケート調査の結果から、プログラムに対しては、11人中7人が概ね満足しており、4人は「ふつう」と答えている。「ふつう」の理由を答えている人は1人で、「もう少しレベルの高いことをしてみたい。」と答えている。「プログラムに参加している理由」としては、8人が、「家族以外の人との関わりをもちたいから」と、「コミュニケーションの練習をしたいから」と答えており、対人・コミュニケーション面での変化を望んで参加している人が多いことが分かった。「プログラム開始後の自身の変化」としても、対人・コミュニケーション面について変化を感じている人が3人、生活面でも、外出がしやすくなったと答えている人が3人いた。一方で、「福祉サービス事業所の等の利用の準備がしたい」と答えている人は1名であった。「今後の生活や仕事についての希望」でも、「作業所に行きたい」と明確に答えている人は2人であり、「アーティスト、配達員、運転士になりたい」や、「イベントの仕事ならできるかもしれない」、具体的な職業について希望を述べている人が2人いた。本人の希望を確認しながら、担当者と、短期目標と長期目標を確認していくことが必要と考えられる。

### 3 家族へのアンケート調査結果

アンケート調査が可能な 10 人の家族に対し実施した。

① 「生活支援プログラムの内容に満足しているか」を、表 11 に示す。

表 11 「生活支援プログラムの内容に満足していますか」について

	満足である	少し満足である	ふつう	少し不満である	不満である	わからない
人数	6	2	0	0	0	2

<その理由について>

(満足・少し満足である)

- ・前に比べると、明るくなったから。(3)
- ・よく話すようになった(1)
- ・プログラムには嫌がらずに参加しているから。(2)
- ・職員が本人に無理のない接し方をしてくれているから。
- ・子どもが唯一外出している場所で、母親以外の人と話しが出来、また、これからのことを相談出来るから。
- ・人との会話がとても苦手で、問いかけられると返事ができないが、最近は、映画の話しだと自分からよく話ができるようになって、嬉しく思う。
- ・本人の状態が安定しているため。
- ・週 1 回に回数を増やして欲しい。

<わからない>

- ・子どもから、話しが聞けないので分からない。(2)

② 「生活支援プログラムを開始して、本人の生活の中で変化を感じるものがあつたか」を、表 12 に示す。

表 12 「生活支援プログラムを開始して、本人の生活の中で変化を感じるものがあつたか」

<生活面に関する変化>

- ・自分から進んで早起きするようになった。
- ・いつもは朝昼逆転しているが、作業の前日は、少し早く寝るようになった。
- ・今年の今頃は、発達障害者支援センターに行くことも大変で、いつも暗い顔をして不規則な生活をしていた。生活支援プログラムに参加するようになってからは、よく出かけるようになり、明るくなった。今では、楽しみにしているようだ。
- ・外出して他人と接するのはまだ無理だが、家族の前では、以前より自由に好きなことをするようになった。

<コミュニケーションに関する変化>

- ・作業を通して、本人が「これは早く出来たよ」と報告してくれる。話しをよくするよ

うになった。

<意欲や自信に関する変化>

- ・自分のことは自分でやろうとする意欲を感じる。
- ・少しは前向きなところが感じられる。
- ・褒められることで、少しずつ自信が持てるようになったようだ。

<その他の変化>

- ・自分の障害を少しずつ理解しようとしているように思える。
- ・自殺をほのめかしたり、突然いなくなるような大きな騒ぎを起こすことがなくなった。
- ・変化は殆ど気が付かない。(1)

③ 「生活支援プログラムを開始して、ご家族のご本人に対する理解や対応について、変化を感じることはあるか。」については以下の通りである。

- ・先の事ばかり考えて、焦っていたが、今はなるようにしかないと、今を考えるようになった。(2)
- ・家族にプログラム参加を応援しようという気持ちがあり、本人もその気持ちを感じて、良い流れになってきているように思う。(3)
- ・出来るだけ干渉しないで、本人の判断で行動できるように心がけている。
- ・担当者との話により、本人の個性を一つずつ確認していくことができた。
- ・本人は、思うようにならないときに、大声を出したり、物に当たったりするので、家族が巻き込まれて大騒ぎになっていたが、段々接し方が分かり、トラブルが少なくなった。
- ・無回答 (2)

④ 「今後のご本人の生活や仕事についてどのような希望をもっているか」については、以下の通りである。

- ・本人の特性や得意な部分を生かせるような仕事を探していきたい。(3)
- ・現状を受け止め、身の丈に合った生活や仕事を認めること、更に自分の努力により人生を切り開いていくことができるようになることが目標である。
- ・いずれ親がいなくなるので、その時までには生活基盤ができるか、不安を持っている。
- ・一人で生活ができるようになれば安心である。そのために、本人に合った仕事があればいいと思う。
- ・まずは就労継続支援 B 型作業所に適応できる能力を身に着けることが目標である。
- ・障害福祉サービス事業所に、次年度から行くようになればよいと思っている。
- ・仕事に対する自信を全くなくしているので、少しずつ自信を持ち、少しずつ“働けるかもしれない”と思うようになってくれればと願っている。
- ・少しずつでも外（他人）に対応出来るようになればいいと思っている。
- ・活動を継続して、だんだん他の所へ行けるようになるといいと思う。プログラム参

加時も、一人で通えるようになってほしい。

- ・他の人に迷惑をかけることのないように、生活をしてくれればと望む。
- ・将来も、発達障害者支援センターに時折通わせてもらい、生活についてアドバイスして欲しい。

⑤ 「生活支援プログラムについての要望」は、以下の通りである。

- ・今後の支援プランのようなものを考えてほしい。
- ・適応力を広げる為、出来るだけ多種多様の作業体験ができるように希望する。
- ・こだわりの意識を軽減できるような訓練作業があれば取り入れて欲しい。
- ・同じくらいの年齢の人と多く話す機会があればよいと思っている。
- ・本人の状態に応じて、レベルアップを行って欲しい。参加日に合わせて、本人に体調等の管理をさせたいと思う。
- ・特にない (3)
- ・無回答 (2)

家族へのアンケート調査の結果から、10人中8人は、生活支援プログラムに概ね満足しているが、2人は、子どもと話しができないので、「わからない」と答えている。「本人の変化」については、生活面やコミュニケーション、意欲などの面で変化が挙げられていたが、「変化に気付かない」と答えた人も1人いた。「家族の変化」としては、家族の本人に対する姿勢や対応方法が変化した人が4人いた。また、3人は、家族が本人に対し「応援する気持ちを抱いている」と答えている。「今後の本人の生活や仕事についての希望」については、本人や家族の状態により意見も様々であり、仕事や生活を自立してできることを願っている家族もいれば、「少しずつ自信を持ってほしい」と、願っている家族もいた。「生活支援プログラムへの要望」については、内容のレベルアップや支援プランの希望等があった。

#### 4. 「発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会」のアンケート調査結果

研修会参加人数は62人、アンケート回収数は58、アンケート回収率は95%であった。アンケート回収者の内訳を、表12に示す

表12 アンケート記入者の立場について

	本人 16-20歳	本人 21-25歳	本人 26-30歳	本人 31-35歳	本人 36-40歳	家族	支援者	合計
人数	2	2	3	6	2	30	13	58

アンケートの結果について、 図 1 から図 2 に示す。

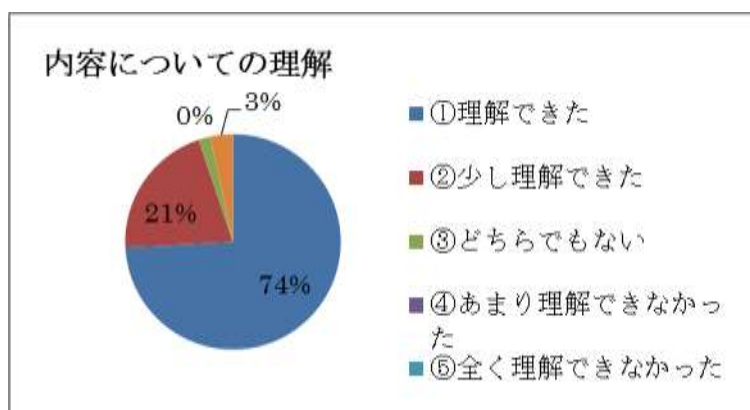


図 1 「講義の内容について」の理解度

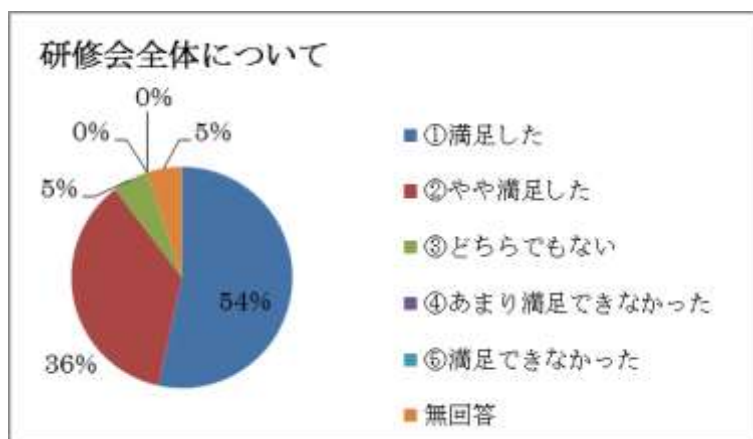


図 2 「研修会全体を通して」の満足度

図 1 の「講義の内容について」理解できたか、の主な内容を以下に示す。

<当事者の発表について>

- ・自身の体験や気持ちの変化について話してくれた内容は、大変貴重だった(2)
- ・体験者の生の話に感動した。理解のある上司や会社があれば続けられると信じている。
- ・本人の背中を大きく押してくれたと思う。勇気をもって発表して下さり、感謝している。

<講義について>

- ・各種支援機関の役割やサービスの内容など、流れがまとめられて分かりやすかった。(2)
- ・自分で働いて、色々聞いてたりして考えていけないといけないと思った。まず生活面からしっかりしていけないと思った。
- ・改めて気付かされる事があった。自分を知り、会社に配慮してもらいたいことをまとめたい。

- ・力強いサポート機関があることを知ったので、一つずつ進めていきたい。

図 2 の「研修会全体を通して」満足できたか、の主な内容を以下に示す。

<当事者の発表について>

- ・体験談が参考になった。(5)
- ・体験者の話がよかった。(2)
- ・支援を受け仕事をしている当事者の話を聞いたことが良かった。本人の心の動きが分かった。

<講義について>

- ・就労に向けて必要な事が、とても分かりやすかった。
- ・自分の障害を理解しないと、就職しても長続きしないと思った。
- ・今日の話をおぼれないようにし、今後の就職活動に役立てたい。
- ・適材適所で働く場所があれば、きっと生きていけると思った。また、理解者や支援者を増やす取り組みが必要だと思った。
- ・もっと、発達障害の人が働くうえで考えないといけない事などのアイディア欲しい。

図 1 の結果から、講義の内容については、参加者の 85% が、概ね理解しており、図 2 の結果からは、90% が研修会に概ね満足していることが分かった。

参加案内は、生活支援プログラムの参加者全員と、つばさに相談がある高校生以上の本人、就労支援機関、相談機関等に行い、市政だよりによる募集も行った。生活支援プログラムに参加している本人(2人)と保護者(2人)の参加があり、参加した本人からは、「当事者発表がとてもよかった。自分も同じような経験をしたので、気持ちがよくわかった。」という感想が聞かれた。プログラム参加者の中には、大勢の人の中が苦手な会場に入れない人もいるため、必要としている参加者には個別に内容を伝達するなど、配慮を行う必要がある。

## 5. 「障害福祉サービス事業所職員に対する実務研修会」のアンケート調査結果

研修会参加人数は 54 人、アンケート回収数は 45、アンケート回収率は 93% であった。アンケート記入者の内訳を、表 13 に示す。

表 13 参加者内訳について

	福祉サービス事業所							相談 機関	その 他	無回 答	合計
	就労 移行	就労 継続 A型	就労 継続 B型	自立 訓練	生活 介護	入所	その 他				
人数	17	12	13	1	4	6	1	4	1	2	61

アンケートの結果について、図 3 から図 4 に示す。

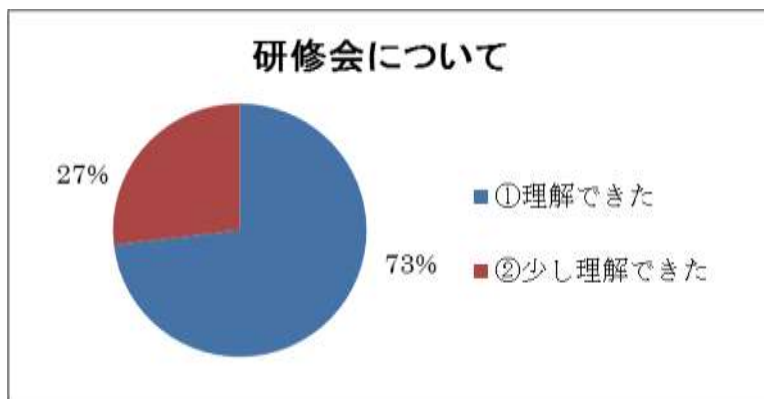


図 3 「講義の内容について」の理解度

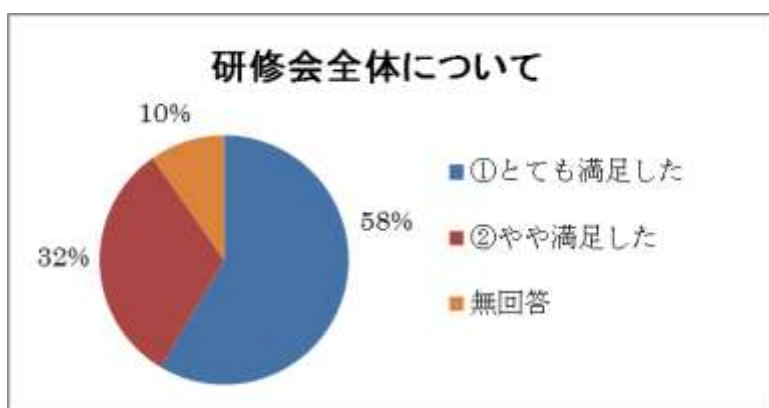


図 4 「研修会全体を通して」の満足度

図 3 の「講義の内容について」理解できたか、の主な内容を以下に示す。

- ・自分たちでもできる取り組みを見つけることができ、参考になった。(5)
- ・工夫されていることを、現場でも実践したいと思った。(3)
- ・すぐに利用できそうな取り組みが多く、悩んでいたことが講義で分かり勉強になった。
- ・とても勉強になった。様々な経験や情報を理解して、就労に向けての支援者の姿勢や考え方を学ぶことができた。就労継続支援施設でも、社会性やソフトスキル、ライフスキルについて支援していきたい。
- ・現在行っている取り組みを知ることができてよかった。当事者の方達へ伝えていき、自信が持てるようにしたい。

図 3 の結果から、講義の内容については、参加者の 100% が、概ね理解しており、図 2 の結果からは、90% が研修会に概ね満足していることが分かった。講義は、写真やビデオなど、視覚的な情報が多く使われていたため、参加者



には具体的な支援の方法や、使用されている教材等の内容が分かりやすかったのではないかと想像される。アンケートには、「参考になった」や、「現場でも実践したい」などの意見が複数あった。また、参加者の中には、視覚障害者の事業所や救護施設職員なども含まれ、様々な機関において、発達障害者の具体的な支援方法についてのニーズがあることがわかった。

## 6. 考察

生活支援プログラムは、平成 24 年度より実施しているが、長期にわたり在宅生活が続いた人が多いため、個人の変化のためには長い期間を要しているが、この一年間の中でも、参加状態に変化が見られている。

参加者の一年間の主な変化を、表 14 に示す。

表 14 参加者の一年間の主な変化

	参加開始時期	今年度の状態（主な変化）
A	H26 年 4 月	フリースクールを卒業後、生活支援プログラムに参加する。障害福祉サービス事業所の体験も重ね、郵便局のアルバイトの採用試験に挑戦した。
B	H26 年 8 月	ごく限られた場所にしか行けない状態であるが、年度末に、発達障害者支援センターの担当者と障害福祉サービス事業所 2 カ所の見学に行くことが出来た。
C	H26 年 6 月	職員が尋ねても意思表示ができなかったが、頷いたり、アンケートを使用しての意思表示が出来るようになってきた。家族の前でも自由に振舞う事が増えてきた。
D	H24 年 7 月	意思表示が出来る場面が増えてきた。また、面談では自身の悩みを自分からよく話すようになった。H と合同での作業を月 1 回行い、少しずつ H の方を見ることが出来るようになってきている。
E	H24 年 4 月	前期の福祉サービス事業所体験後、8 月末より体験した施設を正式利用する。しかし、体調を崩したり、障害者と一緒に働くことに疑問を抱くようになり、事業所を辞めて、2 月に生活支援プログラムに戻る。
F	H24 年 8 月	6 月より、就労継続支援 B 型の事業所に通い始め、プログラム参加を終了する。定期的に発達障害者支援センターでの来所相談を行い、担当者が経過を確認しながら助言を行っている。
G	H24 年 8 月	昨年度から参加している当事者会に参加することが楽しみの一つになっている。対人緊張が強いが、昨年度体験利用した障害福祉サービス事業所に、今年度も前期、後期とも体験実習に行くことができた。
H	H24 年 6 月	障害福祉サービス事業所の体験を見合わせていたが、今年度後期の体験実習に 2 回参加することができ、次年度以降の参加にも意欲を見せている。D との合同作業では、D を気遣う場面も見られた。

I	H26年 4月	仕事の失敗体験などから、殆ど会話をすることがなくなっているが、プログラム参加時は、自分の好きな映画についての話しをするようになった。毎回、見た映画のチラシを持参する。
J	H24年 4月	6月までは参加していたが、体調を崩し参加を中断する。
K	H26年 6月	在宅の期間が長くなり、家族との関係が悪くなっていたが、プログラムに参加することで、家族の理解が得られやすくなり、精神的な状態が安定する。自殺企図がなくなっている。
L	H25年 8月	昨年度から、1年間中断していたが、本人の申し出によりプログラムを再開する。家族とのトラブルについて、興奮して大声で話すことがあったが、職員と話しをし、その後は落ち着いて参加している。作業だけでなく、職員と家やアニメのことなどを話したいと希望する。
M	H26年 10月	5年ほどひきこもっていたが、今年度より生活支援プログラムに参加する。決まった場所に通うことが苦手ということで、無理のないペースで月1回実施する。パソコン作業を行っており、習得したスキルで、家庭で家計簿を作成する。

今年度、障害福祉サービス事業所の利用を開始した人は2名であったが、他の参加者と合同での作業を継続できるようになった人や、つばさで行なっている当事者会に安定して参加できるようになった人などがおり、プログラム参加を中断した1名以外は、少しずつであるが良い方向に変化していると言える。S-M 社会生活能力検査の結果でも、身辺自立、移動、作業、集団参加、自己統制において僅かに数値が上がっている者が4名おり、プログラムに参加することで、「慣れた所であれば、自分で出かけるようになった」や、「服装に気を付けるようになった」などの変化が見られた。行動記録からは、対人・コミュニケーションに関するよい変化が最も多かったことが分かり、頷きなどで少し意思表示や挨拶が出来るようになった緘黙の参加者や、作業中の報告や質問などが少しずつ出来るようになってきた参加者がいた。自身の家庭での悩みや興味関心に関することを、自分からよく話すようになった人もおり、生活支援プログラムが安心してコミュニケーションできる場所になっているのではないかと考えられる。また、個別面談の中では気づきにくい本人の特性について、作業を通して、自身のこだわりやすいところに気付いたり、どのような作業が好きかに気付いた人もいた。

本人へのアンケート調査の結果からも、参加者は、対人・コミュニケーション面での変化を望み参加している人が多いことがわかり、自身の変化についても、コミュニケーション面での変化や「外出が出来やすくなった」ことなどを挙げている人が多いことが分かった。活動内容については、4名が「満足でも、不満でもない」と答えており、中にはもう少しレベルの高いことがしてみたいという意見もあった。活動については、可能な限り、個人の興味

関心や特性に応じた内容を検討しているが、発達障害者支援センター内では、提供できる作業に限られる。また、参加者にとっては、事業所の利用が明確な目標としてあまり意識されていないことが分かり、今後の実施にあたっては、プログラム参加における個別の目標を明確に伝えていくことも必要と考えられる。

家族へのアンケート調査の結果からは、「生活支援プログラムの内容に満足しているか」については、「子どもが話をしないのでわからない」と答えた2名以外は、全員「満足している」ということであった。「本人の生活の中で変化」については、本人へのアンケート調査結果と同様に、「外出することが増えた」ことや、「よく話すようになった」などのコミュニケーション面での変化を挙げた回答が多く、その他、“自信”や“意欲”面で変化を感じているという回答もあった。家族の変化については、家族が焦らず待つようになったと答えた人が3名おり、その他、家庭内でのトラブルが減ったり、家族が本人を応援する環境が出来たという回答もあった。「今後の本人の生活や仕事についての希望」については、本人同様、長期的な目標を記入している保護者と、少し先に出来そうなことを答えている保護者がおり、また、「生活支援プログラムについての要望」としては、「色々な作業体験をさせて欲しい」や、「同じくらいの年齢の人と話す機会を作って欲しい。」など、次のステップを望む意見があることが分かった。

生活支援プログラムの参加者は、学校や職場での失敗経験などから、不安や対人緊張が強く、長期にわたる在宅生活を送ってきた人がほとんどである。自分自身のことを伝えることも難しい人が多く、発達障害者支援センターに相談に来て、何を話せばよいかわからず、結局来所できなくなってしまうケースも少なくない。生活支援プログラムで行っている、職員とマンツーマンでの作業は、発達障害者が苦手とする、会話でのコミュニケーションを要求されないことや、視覚的な作業提示などが、参加しやすく、継続しやすい理由の一つになっていると考えられる。また、所属がないことで、家庭の中でも肩身が狭い思いをしてきた人にとっては、安心して通うことが出来る場所があることが、社会の接点となり、本人だけでなく、家族の安心に繋がっていると考えられる。その結果、家族との関係がよくなって、問題行動が減少しているケースもあった。

アンケート調査の中には、“就職”や“家族からの自立”といった本人や家族の焦る気持ちも見受けられるため、個々人の状態に合わせた無理のない支援を行いながら、本人、家族と、現在の目標の明確化や、共有のための作業を行っていくことも、今後の課題である。また、障害福祉サービス事業所等の利用に向けては、発達障害者支援センターの職員がつかなくても安心して作業ができるよう、個々人に合わせた手順書やマニュアル、リマインダーなどの視覚支援ツールを今後、積極的に使用していくことも必要であると考えられる。

「発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会」については、平成 25 年度より実施しており、今年度は新たに 1 名の当事者に体験発表をしてもらった。当事者、家族の参加以外にも、若者サポートステーション（3 人）や基幹相談支援センター、医療機関からの参加もあった。講義は、地域で実際に支援している障害者しごとサポートセンターの職員による話しであったため、地域の実情も踏まえた話が聞けたことが良かったのではないかと考えられる。“色々な資源やサービスがあることは知っているが、どのような違いがあるのかよく判らない”という話は発達障害者支援センターの相談の中でも聞かれるが、アンケート結果からは、個人個人にあった様々な働き方や段階があることや、就労に向けて自身の特性の理解等が重要であることが理解されたようである。また、当事者の発表が「よかった」、「参考になった」という意見や、「もっと体験者の話が聞きたい」という意見が複数あったため、今後も障害者しごとサポートセンターに協力依頼しながら内容を検討していく。

障害福祉サービス事業所に対する実務研修会は、市内の成人期の発達障害者を対象とした障害者福祉サービス事業所や、若者サポートステーション、ひきこもり支援センターに対して案内を送付し、24 カ所の事業所からの参加があった。講義では、発達障害（主には高機能の発達障害）に特化した就労支援について、写真やビデオを使用した説明があり、参加者は具体的な支援方法について学ぶことが出来たと考えられる。感想には、「参考になった」や、「学んだことを現場で実践していきたい。」という感想が複数あった。市内には、高機能の発達障害の人を受け入れている施設は多数あるが、発達障害に特化した事業所は、就労移行支援事業所が 1 カ所あるのみで、対応がうまくいかず、状態が悪くなったり、通所が継続しないケースも多い。高機能の発達障害者への対応は、個人個人によって必要な支援も違い、本人の特性に応じた様々な支援技術が求められるため、発達障害者支援センターの役割として、今後も実務研修会などを行ない、支援技術の向上に努めていく必要がある。また、当日は、生活支援プログラムについての事業説明を行なった。地域には、所属がなく在宅生活を送っている発達障害者が多数いると考えられ、本プログラムに対するニーズはあると考えられるが、発達障害者支援センターのマンパワーや設備だけでは担っていけない。今後も、プログラムの内容の見直しや効果についての検証を行い、障害福祉サービス事業所、障害者しごとサポートセンター、若者サポートステーション等との連携についても可能性を検討していきたい。